

研究紀要

第30号

—設立35周年記念—

「ナイフ形石器文化終末期」集団の地域的行動
—関東・中部地方の事例研究—

尾田 譲好

殻長・殻高組成からみた関山・黒浜式期の貝塚

古谷 渉

大宮台地における諸磯式土器と浮島式土器の影響関係

中川 莉沙

縄文時代中期の環状集落と小規模集落の関係性について

松浦 誠

ヒスイ輝石岩製の磨製石斧

上野真由美

柴田 徹

西井 幸雄

麻生 敏隆

坂下 貴則

小茂田 幸

大屋 道則

埼玉県内の緑色凝灰岩と菅玉

山田 琴子

上野真由美

赤熊 浩一

小林まさ代

大屋 道則

関東地方における周溝持建物の系譜

福田 聖

埼玉県における横穴式石室の分類と編年
—無袖石室と片袖石室を対象に—

青木 弘

北武藏児玉地域における内斜口縁环の編年的位置づけ

山本 良太

盾持有人埴輪頭部の分類と変遷について

長谷川啓子

鉄鎌からみた「征矢」と「野矢」についての予察
—埼玉県内における古代遺跡からの出土事例を中心に—

渡邊理伊知

古代寺院における食堂院の構造
—平城京遷都後の官寺を中心に—

香川 将慶

2016

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目 次

序

- 「ナイフ形石器文化終末期」集団の地域的行動 尾田 譲好 (1)
—関東・中部地方の事例研究—
- 殻長・殻高組成からみた関山・黒浜式期の貝塚 古谷 渉 (19)
- 大宮台地における諸磯式土器と浮島式土器の影響関係 中川 莉沙 (37)
- 縄文時代中期の環状集落と小規模集落の関係性について 松浦 誠 (57)
- ヒスイ輝石岩製の磨製石斧 上野真由美
柴田 徹
西井 幸雄
麻生 敏隆
坂下 貴則
小茂田 幹
大屋 道則 (69)
- 埼玉県内の緑色凝灰岩と管玉 山田 琴子
上野真由美
赤熊 浩一
小林まさ代
大屋 道則 (79)
- 関東地方における周溝持建物の系譜 福田 聖 (87)
- 埼玉県における横穴式石室の分類と編年 青木 弘 (107)
—無袖石室と片袖石室を対象に—
- 北武藏児玉地域における内斜口縁坏の編年的位置づけ 山本 良太 (135)
- 盾持人埴輪頭部の分類と変遷について 長谷川啓子 (149)
- 鉄鎌からみた「征矢」と「野矢」についての予察 渡邊理伊知 (163)
—埼玉県内における古代遺跡からの出土事例を中心に—
- 古代寺院における食堂院の構造 香川 将慶 (181)
—平城京遷都後の官寺を中心に—

盾持人埴輪頭部の分類と変遷について

長谷川啓子

要旨 盾持人埴輪は人物埴輪の一種に分類されているが、その様態は他の人物埴輪と一線を画しているものが多い。盾持人埴輪は、これまでの研究でも様々な観点からその特色や性格を見出す試みが行われてきたが、特に人物埴輪でいうところの「帽子」もしくは「髪型」に相当する頭部の表現は多様であると認識されている。本稿では、盾持人埴輪の分布を明らかにし、盾持人埴輪の特異性や頭部の表現の変遷を探る。全国の盾持人埴輪の頭部を集成した結果、東日本と西日本では同じ「盾を持つ人物」を模した埴輪であっても、頭部表現に時期差や地域差がみられ、全く異なる成立・変遷過程を辿っていくことが確認できた。

はじめに

盾持人埴輪とは、人物埴輪の一種で主に人物の顔の下に盾を造形するものを指す。一部例外もあるが（註1）、多くは手足を表現しない（若松・日高 1992）。その表情は、目を吊り上げるもの、逆に眉を下げて口の端をあげ、あたかも笑っているかのようなものがあり、他の人物埴輪とは一線を画した特徴をもつ。

古墳においては他の人物埴輪から離れた周溝の外側・屈曲部、正面などに立てられる場合が多く（若松・日高 1992）、迫りくる悪霊や外敵から古墳を守る辟邪を担ったのではないかとする意見が多い。

わざわざ盾の上に人間の顔をのせたのはなぜであろうか。そのような職掌の人間が存在したのか、或いは他の意味があったのだろうか。盾持人埴輪の本来の姿や意味に近づく手段の一つとして、今回はその頭部に着目した。

先行研究においても、表現の種類は多岐に渡っていることが指摘されてきた。例えば、若松良一は埴輪の頭部研究において「(埴輪の)冠帽には防寒や日よけなどの機能だけではなく、着用する人物の身分や職掌などの社会的な特性を反映してしたり、呪術性または宗教性を帯びている可能性

がある」（若松 1993）と考察した。

同じような趣旨から、盾持人埴輪の頭部にも、他の人物埴輪とは異なる意味をもつ可能性があると仮定した。本稿では、盾持人埴輪の一研究として、頭部の集成を行い、その変遷を辿ることを試みる。そして、地域や時代で共通する表現を改めて確認する。

1 先行研究と問題の所在

盾持人埴輪は、古くから「盾を持つ人物の埴輪」であった可能性が指摘されており、その認識は大正時代まで遡る（大野 1912）。

多角的な視点から研究してきた盾持人埴輪だが、1990年代以降、複数の研究者により頭部の分類がなされている。

若松は、他の人物埴輪の編年に合わせて盾持人埴輪を分類し、盾持人埴輪の分布は関東地方に集中する傾向にあることに言及した（若松 1992）。頭部については、人物埴輪1a期（巫女埴輪の出現以前）は福岡県羽佐古墳出土を例に、「頭部は本体と一緒に製作されている」という特徴を指摘した。

人物埴輪2期（5世紀後葉）は「被り物については多様である」とし、人物埴輪3期（5世紀末

～6世紀前葉)は近畿地方と関東地方に二分し、近畿地方は「頭頂部は斜めに切り取られていて、塊がれていない」、関東地方は「角状突起を付けた盾持人」の出土が複数あることに着目している。この角状突起について、「丸帽を、笄を用いて頭頂部で留めた笄帽」とし、以後関東地方からの出土が目立つことから、「あたかも笄帽が盾持人のトレードマークだったかの感をいだかせる」と考察した。

続く人物埴輪第4期(6世紀中葉)は多様性が認められるが、終末期の第5期(6世紀後葉)には盾持人埴輪が極端に減少し、良好な資料がないことを指摘した。

盾持人埴輪の特徴については「①盾持人は他の人物埴輪より大振りに製作される傾向が強いこと。②正面性が著しく、耳が横に張り出すものが主流であること。③入れ墨を施すものがあること。④容貌魁偉なものがあること。⑤盾面の装飾は時間的経過とともに簡略化の流れが迫ること。」とまとめた。盾持人埴輪の特徴に迫った草分け的な研究といえよう。

また、塙谷修は全国の盾持人埴輪を集成・分類した(塙谷2001)。塙谷は盾持人埴輪の変容をI～IVの四期に区分し、各期における盾部(外形・装飾・貼付位置)、頭・顔・耳、それぞれの配置状況を分析した。

頭部分類のみを抽出すると、I期(5世紀前半)に出現する盾持人埴輪はその後盛行する個性をもつことから、この時期を盾持人埴輪の出現期としている。

II期(5世紀後半)は、東日本では円錐形・頭頂部に飾りを付けたものが主流であり、西日本では円筒形・頭部側面に立飾りを付ける例、背を表現した例がみられ、円筒形以外はこの時期以降出現しないことから、占い特徴として考えている。

III期(6世紀前半)は、東日本では笄帽と称されてきた頭頂部の棒状飾りが一般化し、西日本で

は円筒形のものにはば限定されている。

IV期(6世紀後半)は、東日本では笄帽が継続し、その変異形と考えられる円筒形の飾りが関東地方北西部を中心に出現し、西日本では円筒形のみとしている。

以上の分類を踏まえ、塙谷は盾持人埴輪の頭部について「他の形式の人物に比べて多様であり、時期的にも地域的にも変化に富んでいる」「造形の対象となる実像が不確かだったことが想定される」とから、「仮想の姿あるいは仮裝の姿を写している可能性」を指摘した。

先行研究における盾持人埴輪の頭部造形をまとめて、「5世紀前半頃に西日本に出現し、5世紀末にかけて多様化しつつ東西日本の地域差が現れ、6世紀に入ると東日本ではいわゆる笄帽が、西日本では円筒形の頭部が主流になる。6世紀後半は、東日本では笄帽に類するものが一般化する一方、西日本で円筒形が継続する」といえる。若松・塙谷両氏とも、分類の大枠は同じである。これに加えて、頭部表現はさらに詳細な地域差・時期差が見取れるものと考えられる。本稿では盾持人埴輪の頭部の細かなパターンや地域差を詳しく観察し、頭部表現の変遷を見出していく。

2 盾持人埴輪頭部の集成と分布

以下、盾持人埴輪頭部の集成結果による分析・考察を述べる。なお、部位の呼称は日上から頭全体を「頭部」、頭部上端を「頭頂部」とする。

本稿では、盾持人埴輪の頭部の詳しい表現・年代・出土地を把握するために、出土状況等から盾持人埴輪とするに相応しい資料であることを前提に、頭頂部が残るか復元可能なものであり(註2)、先行研究によっておおよその製作年代が推定され(註3)、出土地が都道府県単位で特定できる資料に限って集成した。その結果、41遺跡 77個体の盾持人埴輪の頭部が集成できた(第1表)。大半は関東地方、特に群馬県・埼玉県に集中する。

3 群馬・埼玉の盾持人埴輪の様相と変遷

(1) 頭部分類

塙谷は盾持人埴輪の頭部を「円錐形を呈するもの」「頭頂部に飾りを付けるもの」「円筒形を呈するもの」「頭部側面に立飾りを付けるもの」「甲を表現したもの」の5つに大別し、さらに細かなカテゴリゴリに分類した（塙谷 2001）。

本稿では、盾持人埴輪の頭部が多様であることを踏まえ、「笄系」「鳥帽子系」「結束系」「冠系」「冑系」「その他」の6類に大別し、それぞれの表現の変遷や地域差を観察する（第1図）（註4）。

- ・「笄系」…頭頂部に棒状・板状の装飾表現をもつ例。本稿では、この頭頂部を「笄」と仮称する。
- ・「鳥帽子系」…頭頂部に向かって円錐形に窄まり、円筒形を呈さない例。頭頂部には装飾表現を持たない。
- ・「結束系」…粘土板を縦に隙間なく並べて頭頂部を巡らす例。
- ・「冠系」…頭頂部が円筒形を呈する例。これを「冠」と仮称する。
- ・「冑系」…頭頂部から顎周りまでを覆い、あたかも冑を模したように見える例。
- ・「その他」…どの系統にも当てはまらない例。

(2) 頭部の様相と変遷

頭部が残存している盾持人埴輪が多く分布する群馬県・埼玉県では、頭部の推測できる資料は5世紀後半頃より見られ、この時期に盾持人埴輪が波及したと推測できる。

「笄系」に分類される頭部はこの地域で30個体あり、5世紀後半の群馬県では保渡田古墳群から笄系が多数出土している。保渡田古墳群出土の頭部（第2図11-1～6）は、鳥帽子系の1体（11-4）を除く5体すべてが笄系であり、頭頂をU字状に反らせている。近距離にある保渡田八幡塚古墳においても、2体（第2図12-2、3）が

笄系の頭部をもっている。しかし12-2は保渡田古墳跡と類似するU字状であるのに対し、12-3は両端がラッパ状に聞く点で、表面に若干の差がみられる。埼玉県では女塙1号墳の2体（第3図22-1、22-2）が笄系であり、22-1は笄をややU字状に反らせ、22-2はやや水平にされている。おくま川古墳は4体（第3図23-1～4）すべてが笄系の頭部であり、いずれも笄をほとんど反らせないか、両端をわずかに持ち上げている。

6世紀前半においても、群馬県中二子古墳例（第2図14-1～4）や埼玉県瓦塙古墳例（第3図25）のように、笄の中心をやや瘤ませているものの、ほとんど反らせないような形が多いが、逆に埼玉県権現坂埴輪窓跡例（第3図24）のように、両端を全く反らせないT字状のものも見られるようになる。

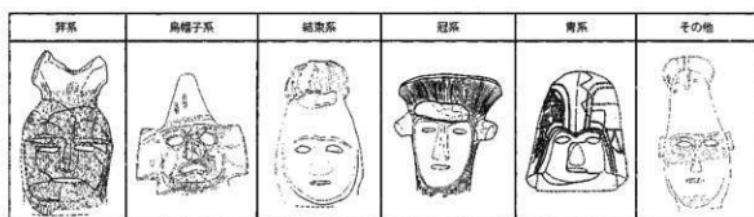
そして6世紀後半では一転し、笄に大きな変化が見られる。群馬県綿貫觀音山古墳例（第2図16-2）、戸塚本町例（第2図18-2）、赤堀村59号古墳例（第2図19）、一ノ宮3号古墳例（第2図20-1、2）、埼玉県将軍山古墳例（第3図26）の6体が、笄をV字状に大きく反せる形である。

また、綿貫觀音山古墳例（第2図16-1）、埼玉県前の山古墳例（第3図27）のように、笄を中空にして大振りに製作するという、これまでにない表現方法も取り入れられている。笄に装飾が施されるものもみられ、16-2、17、20-1、20-2、27は笄の中央に垂飾りのようなものを持つ。一見すると笄を結んでいるようだが、16-2は先が輪になっており、27は日の上まで紐が垂れるかのようで、結びを表現したものとは断言しがたい。

「鳥帽子系」に分類されるものは4体と少なく、全て群馬県保渡田古墳群から出土している。同じ系統ではあるが、保渡田古墳跡例（第2図11-4）

第1表 盾持人埴輪頭部の対象資料出土遺跡一覧

遺跡番号	個体数	遺跡名	所在地	墳形	規模(m)
1	1	原山1号墳	福島県西白河郡泉崎村	前方後円	20
2	1	愛宕塚古墳	栃木県下都賀郡壬生町大字生甲	前方後円	77
3	1	中台26号墳	茨城県つくば市大学北条宇吉城	円	17.5
4	1	常陸白方5号墳	茨城県都城郡白石村白方	前方後円	27
5	1	伝茨城縣	茨城県(東京国立博物館藏)	不明	不明
6	1	向原	茨城県	不明	不明
7	1	原原	茨城県つくば市下横場	不明	不明
8	3	東深井9号墳	千葉県流山市東深井	前方後円	21
9	4	龜角寺101号墳	千葉県成田市大竹字中内	帆立貝	30.5
10	4	高上山古墳	神奈川県横浜市戸塚区上久保町	円	25
11	6	保渡田V字道跡	群馬県群馬郡群馬町保渡田	連構群	—
12	7	保渡田八幡宮古墳	群馬県群馬郡群馬町保渡田	前方後円	102
13	1	太子塚古墳	群馬県高崎市箕郷町	帆立貝	25
14	3	中二子古墳	群馬県前橋市西人室町	前方後円	111
15	3	原堀り1号墳	群馬県太田市	帆立貝	26.1
16	2	綿貫親音古墳	群馬県高崎市綿貫町	前方後円	97
17	1	内堀1号墳	群馬県前橋市西人室町	帆立貝	37.4
18	2	藍草本町	群馬県新田郡數座郡本町	不明	不明
19	1	赤堀村59号墳	群馬県佐波郡赤堀町	前方後円	51
20	2	一ノ宮3号墳	群馬県富岡市一ノ宮	前方後円	47
21	1	稻荷山古墳	埼玉県行田市埼玉	前方後円	120
22	3	女塚1号墳	埼玉県熊谷市今井字女塚	帆立貝	46
23	4	おくま山古墳	埼玉県東松山市古原	帆立貝	62
24	1	極近坂埴輪廻廊	埼玉県熊谷市千代	埠輪廻	—
25	1	瓦塚古墳	埼玉県行田市埼玉	前方後円	67
26	1	将軍山古墳	埼玉県行田市埼玉	前方後円	90
27	1	前の山古墳	埼玉県小牛田市小島	円	24
28	1	十条	埼玉県児玉郡美里町十条	不明	不明
29	1	茅原大墓古墳	奈良県桜井市茅原	帆立貝	72
30	2	寺戸鳥掛塗跡	奈良県北葛城郡広陵町	円?	15?
31	1	池田4号墳	奈良県大和高田市	前方後円	不明
32	1	羽子田1号墳	奈良県磯城郡田原本町	前方後円	30
33	1	珠城山3号墳	奈良県橿原市穴師	前方後円	60
34	2	神並・西ノ辻遺跡	大阪府東大阪市	導水施設	—
35	3	井手扶3号墳	鳥取県西伯郡淀江町	円?	26.6
36	1	押塚古墳	福岡県福岡市	前方後円	75
37	1	寝堂遺跡	福岡県浮羽郡古井町	前方後円	91
38	1	仙道古墳	福岡県朝倉郡鞍手町	円?	49
39	1	中ノ城古墳	熊本県八代郡龜北町	前方後円	不明
40	1	神領10号墳	鹿児島県鴨野町	前方後円	54
41	2	舟塚古墳	茨城県小美玉市上玉里	前方後円	72



第1図 頭部と頭頂部・6系統代表格

分類 年代	笄系	鳥帽子系	結束系	冠系・その他
5世紀後半	 11-1 保渡田VII  11-2 保渡田VII  11-3 保渡田VII  11-5 保渡田VII  11-6 保渡田VII  12-2 保渡田八幡塚  12-3 保渡田八幡塚	 11-4 保渡田VII  12-1 保渡田八幡塚  12-6 保渡田八幡塚  12-5 保渡田八幡塚  12-4 保渡田八幡塚	 12-7 保渡田八幡塚	 13 太子塚
6世紀前半	 14-1 中二子  14-2 中二子  14-3 中二子  14-4 中二子  15-3 塚造り			 15-1 塚造り  15-2 塚造り
6世紀後半	 16-2 細貫觀音山  16-1 細貫觀音山  17 内堀1号  18-2 藍塚本町  19 赤堀村59号  20-1 一ノ宮3号  20-2 一ノ宮3号			 16-1 藍塚本町

第2図 群馬県出土盾持人埴輪頭部の変遷

分類 年代	笄帽			結束	冠系
5世紀後半	22-1 女塚	22-2 女塚	23-1 おくま山	22-3 女塚	21 稲荷山
	23-2 おくま山	23-3 おくま山	23-4 おくま山		
6世紀前半	24 檻現坂	25 瓦塚			
6世紀後半	26 将軍山	27 前の山			
時期不明	28 十条				



群馬・埼玉出土遺跡分布図

第3図 埼玉県出土盾持人埴輪頭部の変遷

は先端を前方に反らせ、保渡田八幡塚古墳例（第2図12—5）は頭頂部がつぶれている。保渡田八幡塚古墳の3体（第2図12—1、5、6）が四角形の板を顔の横に貼り付けられていることに着目すると、仮にこの板が耳ではなく頭部表現の一部であったならば、胄を表現した可能性も否定はできない。

「結束系」は、この地域だけで見られる表現である。出土例も2遺跡3体（第2図12—4・7、第3図22—3）と少なく5世紀後半に集中しているが、「笄系」とは異なり、見た目はどれも類似している。両遺跡とも別の盾持人埴輪を伴うことから、他の盾持人埴輪と区別して作る必要があったと見られる。何を表現したかは推測の域を出ないが、女塚1号墳例（22—3）の頭頂部の下に貼り付けられる粘土板を糸や鉢巻の表現とすれば、この頭部は髪や帽子を被っているとも考えられる。

「冠系」は群馬県太子塚古墳例（第2図13）、埼玉県埼玉古墳群稻荷山古墳例（第3図21）と例が少ない。中央に切込みを入れるという作りは似ているが、形状に差異が見受けられる。13は中央にV字状の切込みが入り、21はU字状に切込み、寸胴である。どちらも5世紀後半のものであり、6世紀の例は見られない。

この地域では「胄系」の例はなく、「その他」は3体である（第2図15—1・2、18—1）。どの例も他に類を見ない作りであり、同遺跡・同地域で出土している頭部とも全く異なっているため、分類するのは難しい。

また、頭部全体の作り方に着目すると、日から頭頂部までの距離が5世紀後半では比較的狭く作られているに対し、6世紀前半には徐々に間隔が広がりはじめ、6世紀後半には日から上が長くなる傾向がある。頭部の作り方にも時期差が認められた。

（3）関東周辺の様相

群馬・埼玉両県の周辺地域では、主に6世紀前半ごろから例が見られる。

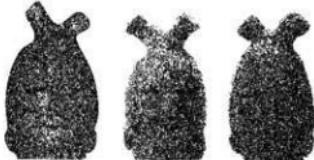
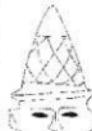
「笄系」では、6世紀初頭の福島県原山1号墳（第4図1）に例がある。笄は他に類例がない表現であり、被り物を模しているのか髪型を模しているのかは判断し難い。塙谷の指摘（塙谷2001）以降も、以北からの出土報告はなく、現在においても同墳が盾持人埴輪の北限となるであろう。

さらに、栃木県、茨城県、千葉県、神奈川県から6世紀前半から6世紀後半にかけての盾持人埴輪の出土が見られる。千葉県東深井9号墳出土例（第4図8—1～3）以降、茨城県常陸白方5号墳（第4図4）、同舟塚古墳（第4図41—1）、同向原（第4図6）で笄の両端をV字状に反らせる表現が目立ってくる。群馬県・埼玉県でも、笄の両端を大きく反らせる形が出現するのは6世紀後半にかけてで、周辺地域でも期を一にすることが窺える。

一方、「冠系」に分類されるものは群馬県・埼玉県よりも例が多い。6世紀前半の千葉県竜谷寺101号墳例（第4図9—1～4）から、茨城県中台26号墳例（第4図3）、神奈川県富士山古墳例（第4図10—1、2）、時期は不明であるが茨城県塙原例（第4図7）がその類にあげられる。群馬・埼玉両県は中央に切れ込みがあるのに対し、周辺地域はこれがなく、頭頂部をややラッパ状に開くという例が多い。中には中台26号墳例（3）のように、顎と頭部が一体化したようなものもあり、開口の仕方に通じるものとの、地域性に違いが大きい。こうした「冠系」は、特に茨城県・神奈川県・千葉県に出土が集中している。

「烏帽子系」は、茨城県舟塚古墳（第4図41—2）、伝茨城県（第4図5）の二例がある。伝茨城県の先端を前方に傾ける作りは、前述した群馬県保渡田Ⅶ遺跡例（第2図11—4）と類似する。

その他、周辺地域では「結束系」「胄系」は認

分類 年代	笄系	冠系	烏帽子系
6世紀前半	 1 原山1号墳	 9-1 竜角寺101号	 9-4 竜角寺101号
6世紀後半	 8-1 東深井9号 8-2 東深井9号 8-3 東深井9号	 9-3 竜角寺101号 9-2 竜角寺101号	 41-2 角帽
時期不明	 6 向原	 7 塚原	 5 伝茨城

第4図 岐馬・埼玉周辺地域の盾持人埴輪頭部の変遷

められない。

4 西日本の様相

西日本の盾持人埴輪の出現は比較的早い。現在確認されている中では奈良県茅原大墓古墳出土の盾持人埴輪（第5図29）が4世紀末の例である。しかし関東地方ほど個体数は多くないため、変遷を辿るには難しいところがある。

西日本で特徴的なのは「背系」が複数見られるところである。茅原大墓古墳例の他、奈良県寺戸鳥掛遺跡例（第5図30-1、2）や同池田4号墳例（第5図31）は頭全体を覆うような表現であり、背を想起させる。鹿児島県神領10号墳例（第5図40）は写実的であり、一見すると眉底付背のようにも受け取れる。熊本県中ノ城古墳（第5図39）も頭全体が覆われている。4世紀末から6世紀前半頃までのやや長い期間、近畿から九州までの広範囲で作られていたようである。

「烏帽子系」は、福岡県押塚古墳（第5図36）の一例のみあげられる。こちらも群馬県保渡田VII遺跡例（第2図11-4）、佐賀県原例（第4図5）と同様に、先端を前方へ傾ける想定されている。頭部には線刻が施されている。

「冠系」は、5世紀後半から6世紀後半まで、個体数が少ないが例が見られる。大阪府神並・西ノ辻遺跡例（第5図34-1、2）は群馬・埼玉両県でみられたように中央に切込みが入っており、奈良県羽子田1号墳例（第5図32）は逆三角形の透かしが入る。6世紀後半の奈良県珠城山3号墳例（第5図33）、福岡県仙道古墳例（第5図38）は中央の切れ込みがない。関東周辺でも切れ込みを入れない例が複数見られたが、この2例は目と頭頂部の距離が狭く、またラッパ状に開口しないため、同じものを横したかは不明瞭である。

「その他」は鳥取県（第5図35-1～3）、福岡県（第5図37）などに例が見られる。特に井出挿3号墳例は、確認されている3体全てが異

なった表現であり、角状の突起をもつもの（35-1）、角状突起を一巡させるもの（35-2）は「冠系」に類似しているとも考えられるが、他の「冠系」とはかけ離れた表現であるため、この類とした。35-3は、一見すると「笄系」にも見えるが、粘土板を張り付けているのではなく、頭頂部をすばめて蓋をする特異な作り方であるため、「笄系」には分類できないと考えた。福岡県塚原遺跡例（37）は、左右から板飾りを挟むような独特的の作り方をしている。

西日本では、関東地方で盛行していた「笄系」「結束系」に分類できる頭部が皆無であることから、関東地方とは異なる系譜を辿っていたようである。

まとめ

以上のように、群馬県・埼玉県では、盾持人埴輪の頭部のほとんどが「笄系」に分類された。5世紀後半から6世紀前半にかけては笄をあまり反らせないのに対し、6世紀後半からはV字や中空、笄を大振りに作るもの、装飾するものも見られ、表現が多様化している。また、「結束系」は当該地域でのみ確認できた。「烏帽子系」「冠系」も複数あり、5世紀後半に作られた例が多い。

関東周辺地域では、「笄系」に次いで「冠状」の個体数が多いことが特徴である。ただし、他地域のように頭頂部の中心に切込みを入れず、上部に向けてラッパ状に開口するものが多い。「笄系」は、群馬・埼玉両県と同じく、6世紀前半から笄をV字に反りあがらせ、日から頭頂部までを長く作っている。

西日本では、先行研究でも指摘されてきた通り、東日本とは頭部表現が全く異なる。最多は「背系」であったが、対象資料数が少なかったため、この結果がただちに西日本を総括できるものではない。

頭部集成と分類を経た結果、笄系に分類される

分類 年代	青系	冠系	鳥帽子系・その他
4世紀末	 29 茅原		 36 拝塚
5世紀前半	 30-2 寺戸鳥掛  30-1 寺戸鳥掛	 34-1 神並・西ノ辻  34-2 神並・西ノ辻	 35-1 井出岐 3号 35-2 井出岐 3号 35-3 井出岐 3号
6世紀前半	 39 中ノ城	 32 羽子田 1号	
6世紀後半		 33 瑞城山 3号	 38 仙道

第5図 西日本出土埴輪人埴輪頭部編年

頭部の表現は関東地方において早い時期から作られ、長期間に渡って多様な形に変化しながら盛行することが確認できた。若松の「笄帽は関東地方の盾持人のトレードマークであったかのような感を抱かせる」(若松・日高 1992) という指摘の通りである。

西日本には同様の表現がほとんど見られないことから、「笄系」は関東に強く根差す表現といえるだろう。ただし、笄帽とされる頭部を持つ人物埴輪は盾持人埴輪だけに限らない(若松 1993)ため、盾持人埴輪独自の頭部表現とするには慎重を要する。

その他、出土の組み合わせに注目すると、盾持人埴輪が複数出土している遺跡では、「笄帽+その他の頭部表現」となる例が多く、頭部が作り分けられていることが改めて確認できた。

本稿では盾持人埴輪の頭部に関し、東日本と西日本でその表現の移り変わりをまとめてきた。今回の集成図化に漏れた盾持人埴輪も複数あり、断言するものではないが、盾持人埴輪の頭部に時期差・地域差を見出すことができた。今後は、関東

地方で盛行する「笄帽」とはどのようなものか、また他の人物埴輪と比較して盾持人埴輪の頭部表現にどのような意味が込められているか考察を重ねていきたい。

謝辞

本稿執筆にあたり、各教育委員会・博物館より写真を提供して頂きました。末筆であります、感謝申し上げます。

註1 奈良県寺戸鳥掛遺跡出土例(小栗 2015)では、盾の縁を削んだ手の造形が残っている。

註2 欠損している想定復元が不可能なものは分類から除外した。

註3 年代は各報告書に基づいた。また、群馬県・埼玉県・茨城県については、以下の文献を参考にした(関 2015、谷伸 2015、志村 2015)。

註4 分類名は便宜上付けたものであり、実際の盾持人埴輪の頭部がこれらを模したと断言するものではない。

引用・参考文献

- 安藤鴻基ほか 1988 『千葉県成田市所在竜角寺古墳群第101号古墳発掘調査報告書』千葉県教育委員会
石塚久則 1980 『塚廻り古墳群』群馬県教育委員会
今村佳子・原田範昭 1994 『野津古墳群』熊本大学考古学研究室
岩田文章 1993 『手扶遺跡II』『淀江町埋蔵文化財調査報告書第31集』淀江町教育委員会
梅沢重昭 1979 『開館記念展 群馬のはにわ』群馬県立歴史博物館
江原昌俊・佐藤幸恵・宮島秀夫・長井正欣 2008 『おくま山古墳(第1・2次)』東松山市教育委員会
大野雲外 1912 『銅鐸と埴輪土偶の關係に就て』『人類學雑誌』第28卷第2号 東京人類學會
太田博之 2001 『旭・小島古墳群—前の山古墳—』本庄市教育委員会
大塚初重・川上博義・小林三郎 1971 『茨城県玉里村舟塚古墳—発掘調査のあらまし』茨城県立美術博物館
岡崎晋明 2013 『盾持人埴輪の諸相』『龍谷日本史研究』第36号 龍谷大学日本史学研究会
岡本健一 1997 『将軍山古墳 確認調査編・付編』埼玉県教育委員会
小栗明彦 2015 『人のかたちの埴輪はなぜ削られたのか』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
柏木一男 2001 『一ノ宮本宿・郷土遺跡II 一ノ宮古墳群』富岡市教育委員会
金井塙良一 1986 『瓦塚古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第四集 埼玉県教育委員会
金子文夫・石山 黙 1983 『塚廻り遺跡I』浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集 福岡県教育委員会
加部一生 1989 『内堀遺跡群II』前橋市埋蔵文化財発掘調査団

- 岩島利行 2005 『国指定史跡愛宕塚古墳』壬生町埋蔵文化財調査報告書第20集 壬生町教育委員会
- 岩島利行 2011 『しあつけ古墳群一下毛野の霸王、青森ノ岩屋から車塚へー』壬生町立歴史民俗資料館
- 熊谷市立熊谷図書館美術、郷土係編 2012 『一地中からの息吹—熊谷の発掘出土品』熊谷市立熊谷図書館
- 黒澤彰哉 2004 『茨城の形象埴輪—県内出土形象埴輪の集成と調査研究ー』茨城県立歴史館
- 黒澤秀雄 1995 〔(仮称)北条住宅団地建設工事地内埋蔵文化財調査報告書 中台遺跡】茨城県教育財團
- 小林行雄・下中邦彦 1974 『陶磁大系。第三巻埴輪』平凡社
- 埼玉県立さきたま史跡の資料館 2012 『ガイドブックさきたま』埼玉県立さきたま史跡の資料館
- 塙野 博・瀧瀬芳之・劍持和夫・新井 端 1995 『江南町史: 資料編 I 考古』江南町
- 塙谷 修 2001 『盾持人物埴輪の特質とその意義』『日本考古学の基礎研究』茨城大学人文学部考古学研究報告第4回茨城大学人文学部考古学研究室
- 寺社下博 1983 『めづか』熊谷市教育委員会
- 清水真一・浜口和弘 1993 『国史跡珠城山古墳群純四面認調査報告書』桜井市埋蔵文化財センター発掘調査報告書11集 桜井市教育委員会・花園大学考古学研究室
- 志村 哲 2015 『群馬県の古墳編年』「東北・関東前方後円墳研究会第20回大会シンポジウム 地域編年から考える一部分から全体へ—発表要旨資料」東北・関東前方後円墳研究会
- 閔 義則 2015 『北武藏の古墳編年』「東北・関東前方後円墳研究会第20回大会シンポジウム 地域編年から考える一部分から全体へ—発表要旨資料」東北・関東前方後円墳研究会
- 高橋浩樹 1993 『守戸鳥掛遺跡発掘調査概報』広陵町教育委員会
- 高橋 裕・戸淵幹夫・浜岡伸也・北沢 寛 1994 『はにわ』石川県立歴史博物館
- 田部井功 1980 『崎下 稲荷山古墳』埼玉県教育委員会
- 塙田良道 1996 『人物埴輪の形式分類』『考古学雑誌』第81巻 第3号 日本考古学会
- 辻 秀人 1982 『原山1号墳発掘調査概報』福島県立博物館発掘報告第1集 福島県教育委員会
- 東京国立博物館編 1983 『東京国立博物館国版目録 考古遺物篇(関東II): 便利章』
- 徳江秀夫 1998 『縄貫觀音山古墳!』群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 橋本達也 2010 『古墳築造南限域の前方後円墳—鹿児島県神領10号墳の発掘調査とその意義ー』『考古学雑誌』第94巻 第3号 日本国考古学会
- 橋本達也 2011 『古墳時代鹿児島のやきものづくり』『やきものづくりの考古学—鹿児島の繩文土器から薩摩焼までー』鹿児島大学総合研究博物館
- 平船文博 2001 『国指定史跡 仙道古墳』三輪町教育委員会
- 平野卓治 2001 『横浜の古墳と副葬品』横浜市歴史博物館
- 福辻 淳 2015 『茅原大塚古墳 第1次~第6次発掘調査報告』桜井市教育委員会
- 前原 豊・戸所慎策 1995 『中二子古墳』大室公園史跡整備事業に伴う範囲確認調査概報Ⅲ 前橋市教育委員会
- 松尾充品ほか 2015 『百八十神坐す出雲 古代社会を支えた神祭り』島根県立古代出雲歴史博物館
- 豆谷和之 1998 『羽子井遺跡第11次調査』『大和を掘る』16 長良県権原考古学研究所附属博物館
- 茂木雅博 1993 『常陸白方古墳群』東海村遺跡調査会、東海村教育委員会
- 矢島 滉 2012 『古墳の守り人—盾持ち人はにわ古墳ー』かみつけの里博物館
- 谷仲俊雄 2015 『茨城県霞ヶ浦北岸の古墳編年』「東北・関東前方後円墳研究会第20回大会シンポジウム 地域編年から考える一部分から全体へ—発表要旨資料」東北・関東前方後円墳研究会
- 若狭 敏 1990 『保渡田古墳』『保渡田古墳群に連なる古墳群』群馬町教育委員会
- 若狭 敏 1998 『顔・かお・KAO 異様な形相は魔除けの願い』かみつけの里博物館
- 若狭 敏ほか 2000 『群馬町埋蔵文化財調査報告書第57集 保渡田八幡塚古墳 調査編』群馬町教育委員会
- 若松良一 1988 『'88さいたま博覧会協賛特別展開録 はにわ人の世界』埼玉県立さきたま資料館

- 若松良一 1993 「埴輪と冠帽」『考古学ジャーナル』No.357 ニュー・サイエンス社
若松良一・口高慎 1992 「形象埴輪の配置と復原される葬送儀礼（上）一埼玉瓦塚古墳の場合を中心に」『調査研究報告』第5号 埼玉県立さきたま資料館

図版出典一覧（番号は個体番号）

- 1 資料所蔵、写真提供：福島県教育委員会（辻秀人 1982 『原山1号墳発掘調査概報』福島県立博物館発掘報告第1集 福島県教育委員会 第4回版より転載）
- 2 岩島利行 2005 「国指定史跡愛宕塚古墳」壬生町埋蔵文化財調査報告書第20集 壬生町教育委員会
- 3 黒澤秀雄 1995 『（仮称）北条住宅跡地建設工事地内埋蔵文化財調査報告書 中台遺跡』茨城県教育財团
- 4 茂木雅博 1993 『常陸白方古墳群』東海村遺跡調査会、東海村教育委員会
- 5 筆者トレース（小林行雄・下中邦彦 1974 『陶磁大系』第二巻埴輪 平凡社より）
- 6 資料所蔵：東京大学総合研究博物館 写真提供：石川県立歴史博物館（高橋裕・戸淵幹夫・浜岡伸也・北沢寛 1994 『はにわ』石川県立歴史博物館より転載）
- 7 資料所蔵、写真提供：東京国立博物館
- 8-1~3 資料所蔵、写真提供：流山市教育委員会
- 9-1~4 安藤鴻基ほか 1988 『千葉県成田市所在竜角寺古墳群第101号古墳発掘調査報告書』千葉県教育委員会
- 10-1~4 資料所蔵、写真提供：横浜市歴史博物館（平野卓治 2001 『横浜の古墳と副葬品』横浜市歴史博物館 p44より転載）
- 11-1~6 若狭徹 1990 『保渡田Ⅶ遺跡 保渡田古墳群に関する遺構群』群馬町教育委員会
- 12-1~7 若狭徹ほか 2000 『群馬町埋蔵文化財調査報告第57集 保渡田八幡塚古墳 調査編』群馬町教育委員会
- 13 資料所蔵、写真提供：かみつけの里博物館
- 14-1~4 前原豊・戸所慎策 1995 『中二子古墳』大室公園史跡整備事業に伴う範囲確認調査概報Ⅲ 前橋市教育委員会
- 15-1~3 石塚久則 1980 『塚廻り古墳群』群馬県教育委員会
- 16-1, 2 德江秀大 1998 『綿貫觀音山古墳』群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 17 加部二生 1989 『内堀遺跡群Ⅱ』前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 18-1 資料所蔵、写真提供：東京国立博物館
- 18-2 資料所蔵：太田市教育委員会 写真提供：群馬県立歴史博物館（梅沢重昭 1979 『開館記念展 群馬のはにわ群馬県立歴史博物館より転載）
- 19 資料所蔵：伊勢崎市教育委員会 写真提供：かみつけの里博物館（若狭徹 1998 『顔・かお・KAO異様な形相は魔除けの願い』かみつけの里博物館より転載）
- 20-1, 2 柏木一男 2001 『一ノ宮本宿・郷上遺跡Ⅱ 一ノ宮古墳群』富岡市教育委員会
- 21 山田井功 1980 『埼玉稻荷山古墳』埼玉県教育委員会
- 22-1, 3 寺社下博 1983 『めづか』熊谷市教育委員会
- 22-2 資料所蔵、写真提供：熊谷市教育委員会
- 23-1~4 江原昌俊・佐藤幸恵・宮島秀夫・長井正欣 2008 『おくま山古墳（第1・2次）』東松山市教育委員会
- 24 塩野博・瀧瀬芳之・鈴持和夫・新井端 1995 『江南町史』資料編I 考古 江南町
- 25 若松良一・口高慎 1992 「形象埴輪の配置と復原される葬送儀礼（上）一埼玉瓦塚古墳の場合を中心に」『調査研究報告』第5号 埼玉県立さきたま資料館
- 26 岡本健一 1997 『將軍山古墳 確認調査編・付編』埼玉県教育委員会
- 27 太田博之 2001 『旭・小島古墳群—前の山古墳—』本庄市教育委員会

- 28 筆者撮影 資料所蔵：埼玉県教育委員会
- 29 福辻 淳 2015 『茅原大墓古墳 第1次～第6次発掘調査報告』桜井市教育委員会
- 30-1, 2 高橋浩樹 1993 『寺ノ鳥掛遺跡発掘調査概報』広陵町教育委員会
- 31 資料所蔵、写真提供：大和高田市教育委員会
- 32 資料所蔵、写真提供：田原本町教育委員会
- 33 清水真一・浜口和弘 1993 『国史跡珠城山古墳群範囲確認調査報告書』桜井市埋蔵文化財センター発掘調査報告書11集 桜井市教育委員会・花岡大学考古学研究室
- 34-1, 2 資料所蔵、写真提供：東大阪市教育委員会
- 35-1～3 岩田文章 1993 『井手扶遺跡Ⅱ』『淀江町埋蔵文化財調査報告書第31集』淀江町教育委員会
- 36 資料所蔵、写真提供：福岡市埋蔵文化財センター
- 37 金子文夫・石山 黙 1983 『塚堂遺跡Ⅰ』浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集 福岡県教育委員会
- 38 半嶋文博 2001 『国指定史跡「仙道古墳』二輪町教育委員会
- 39 資料所蔵、写真提供：東京国立博物館
- 40 資料所蔵、写真提供：鹿児島大学総合研究博物館（橋本達也 2011 「古墳時代鹿児島のやきものづくり」『やきものづくりの考古学—鹿児島の陶文土器から薩摩焼まで—』鹿児島大学総合研究博物館 p.16より転載）
- 41-1, 2 筆者トレス（黒澤彰哉 2004 『茨城の形象埴輪—県内出土形象埴輪の集成と調査研究—』茨城県立歴史館より）

研究紀要 第30号

—設立35周年記念—

2016

平成28年3月14日 印刷

平成28年3月18日 発行

発行 公益財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 熊谷市駒木台4丁目4番地1

<http://www.saimabun.or.jp>

電話 0493-39-3955

印刷 朝日印刷工業株式会社